

JSOG Newsletter

Reason for your choice

No.14
April
2014

わたしたちの医療は「新しい生命」を生み出すためのものです。ひとつでも多くの生命の誕生のために。すべての女性のために。いま、わたしたちができることを...

公益社団法人 日本産科婦人科学会
JAPAN SOCIETY OF OBSTETRICS AND GYNECOLOGY

シリーズ 産婦人科サブスペシャリティへの道

若手医師に聞く 04 女性ヘルスケア

第一線でサブスペシャリティ取得を目指して邁進する若手医師を、各分野で特集します。第4回「女性ヘルスケア」は、徳島大学の加藤剛志先生です。



はじめに

私は現在、徳島大学で勤務し、子宮内膜症をはじめとする良性婦人科疾患の治療、および腹腔鏡下手術を中心に診療し、女性医学分野に関する修練をしています。

私の毎日

外来診療では子宮内膜症や、手術前後の患者さんを中心に、女性医学分野全般について診療しています。手術は、週に2件程度担当しています。腹腔鏡下手術では、自分自身のスキルアップを目指すほか、後輩の医師に対する指導もしています。また、女性医学研究班に所属しており、関連する研究にも従事しています。

女性医学のサブスペシャリティを目指したきっかけ

入局当初は腫瘍研究班に所属し研修を開始しました。学位を取得した後、関連施設で臨床に携わっている間に腹腔鏡下手術の魅力にとりつかれ、研鑽を積み日本産科婦人科内視鏡学会の技術認定医を取得しました。



た。それらの診療経験を通じて、子宮内膜症やがんの患者さんに対する長期的なヘルスケアの重要性を感じ、教授の勧めもあって女性医学分野を志すことになりました。

女性医学のサブスペシャリティの魅力

女性医学はそもそも更年期女性の健康管理を中心とした分野でした。周閉経期に起こる女性ホルモンの変動が引き起こすさまざまな問題について、先輩の先生方が多くの実績を積み上げてこられています。近年はその実績を活かして、例えばがん治療で卵巣機能を失った患者さんなどに対して、ヘルスケアの視点で長期的な健康管理をするなど活躍の場が広がっています。さらに当教室では乳がん検診にも積極的に取り組んでいます。

一方、良性婦人科疾患、特に子宮内膜症では症状や年齢、挙児希望の有無、さらには患者さんのおかれた社会的な立場などを考慮して、長期的治療スケジュールを考えなければなりません。手術が必要な場合には、最善の結果が得られるように手術手技も磨いておかなければなりません。

このように、女性医学の守備範囲はとて広く、あらゆる領域で女性ヘルスケアの視点を持つことが求められます。一方で、ひとりひとりの患者さんとはじっくりと対応し、目の前の病気を治すことだけでなく、さまざまな視点で患者さんにとって真の利益はどこに



あるのかを考え、最適な方針を探していく粘り強さが重要です。診断・治療から予防医学まで、やりがいのある分野だと思います。

医学生、研修医の先生方へのメッセージ

医学生や研修医の先生方とお話しをすると、なんでもできることを重要視されている先生が多いように思います。若いうちにその目標に向かって多くの経験を積み、幅広く研修に打ち込むことは大切なことだと思います。一方で、いずれは自分の得意分野を持つこともまた必要なことです。女性医学は幅広く奥深く、まさにその二に三に合う分野ではないでしょうか。私は、いまだ研修途上にあります。将来性のある分野だと感じています。



加藤 剛志
徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部産科婦人科学分野助教
卒後17年目
趣味・最近サビキ釣りをはじめました。
家族構成…3人家族

第66回 66th Annual Congress of Japan Society of Obstetrics and Gynecology
日本産科婦人科学会学術講演会
会期：2014年4月18日(金)▶20日(日) 会場：東京国際フォーラム

開催予告

IMAGINE THE FUTURE

行で受け取るだけでなく、学術講演会では双方のコミュニケーションが可能で、学術講演会に参加し、物怖じせずに先輩医師に日々の疑問をぶつけて知識と経験を引き出し、引き継いで下さい。

多種多様なプログラム

前々回から始まった専攻医教育プログラムでは基本重要事項54項目を選定し、1年に18項目ずつその道のエキスパートがアンサーパッドを用いたQ&Aも交えて解説を行って来ましたが、今年度は全54項目が1巡目する締めくくりとなります。

国際化の一環として米国(ACOG)、韓国(KSOG)、台湾(TAOG)各団体若手医師によるInternational Workshop for Junior Fellowsが行われるほか、アルゼンチン、イギリス等々から専門家を招請しInternational Seminarなどで講演をして頂きます。国内外の応募の中から選ばれたInternational Session (IS) Award候補者による口演も楽しみます。IS Award候補に惜しくも洩れた演題もPoster Sessionで討議されます。

今回初の試みとして医学部6年生によるラウンドテーブルディスカッション「医学生フォーラム」が行われます。全国61大学10

4年ぶりの東京開催

過去3年、大阪、神戸、北海道と関東を離れていた学術講演会が2020年のオリンピック開催都市、東京に戻ってきました。東京国際フォーラムで「Imagine the future」をテーマに「未来を」というテーマに産婦人科に含まれる4大領域(周産期、腫瘍、生殖、女性ヘルスケア)の教育、最新研究結果の発表、討論が行われます。

先輩医師から学び取れ

学術講演会には、皆さんが使っているその教科書を書いた医師たちの講演を聞くだけでなく、質問する機会だってあります。ベテラン医師たちは若い皆さんからのコンタクトを心待ちにしています。

教科書では知識を一方通

8名の医学部6年生が「著名人の産婦人科疾患に関するマスコミ報道(アンジェリーナ・ジョリーの報道などが社会に与える影響について)」「途上国での出産の問題点と考えられる対策」「少子化について、学生の視点からどういう対策があるのか」の社会派テーマに1グループ9名で構成された12グループが、3グループずつ各テーマに挑みます。

あなたの未来の役割に触れておこう!

医師の仕事で一番大切なのは「患者さんの病気が治るお手伝いをする」ことです。でもそれだけじゃありませんよね。新しい治療法や疾患の原因究明の研究、テクニックの開発、医療制度や社会保険制度などへの関わり…。本日に多種多様です。この学術講演会には全国の産婦人科医師が集結し、多くの分野でより素晴らしい未来を想像し、そして実現を目指します。若いあなたも、この学術講演会に参加してあなたの未来の役割に触れてみませんか。

学術講演会参加費優待

★ 医学生	無料
★ 初期研修医(非会員)	3,000円
★ 初期研修医(会員)	無料

※学生証、証明書を提示ください。

66th Annual Congress of the JSOG

美ヶ原での開催

恒例の日本産科婦人科学会産婦人科サマースクールが長野県松本市に選んできました。全国津々浦々から334名もの学生・初期研修医のみならずにご参加いただき、会場は例年以上の熱気に包まれました。

1日目のプログラム

婦人科腫瘍、婦人科内視鏡、産科超音波検査に関する実習をメインにプログラムが進行しました。婦人科腫瘍はPC上で自由に病理組織標本を観察できるバーチャルスライドシステムを利用したQ&A方式の診断実習を行いました。婦人科内視鏡実習は鉗子の基本的動作から縫合・結紮までのトレーニング、産科超音波では胎児計測や胎児異常の超音波実機での検出3次元エコーでの胎児描出実習などを行いました。懇親会は日本産科婦人科学会有志により結成さ



2日目のプログラム

恒例の早朝集合写真撮影の後、画像診断、婦人科病理、婦人科内視鏡に関する講演が行わ

れたNST (Nissan Sound Team) による楽曲のもと、大盛り上がりでおこなわれました。懇親会後はアドバンスコースの開始です。婦人科腫瘍では悪性腫瘍の内視鏡手術、そして次世代ロボット手術の講演が行われました。今回はロボット実機 (Da Vinci Surgical System) が登場し、多くの方々が楽しんで操作していただきました。そのほかにも顕微鏡授精の実体験や分娩トレーナーによる分娩介助実技などに多くの方々が参加され、指導者ともども汗だくで臨んでおられる姿は頼もしいものでした。

SUMMER SCHOOL 産婦人科サマースクール in美ヶ原 2013.8.3-4

れました。そのおち若手医師主催によるシンポジウムです。第1部「産婦人科のサプスベシヤリテイ、私はこうしてはたらいています」それぞれの現在と未来」では産婦人科専門医取得後のサプスベシヤリテイ領域の紹介や、



その道のりについて語り合われました。第2部では参加者が男女別に分かれて、それぞれが抱える現状や悩みについてフラッシュクイズが行われ、産婦人科医療に携わることの魅力が力強く述べられました。

今回の産婦人科サマースクールは過去最大の参加者数となり大成功に終わりました。これからも、所属施設の枠を超えて全国の若手ベテラン産婦人科医師と語りあえるこの企画に、多くの学生、初期研修医の皆さんが参加してください。そして将来は一緒に我が国の産婦人科医療を担っていただける日が来ることを心より願っております。

昨年は学生として参加し、今回で二回目。今年も新たな発見がありました。

腫瘍の症例検討セミナーでは、昨年は単に臨床経過や病理から疾病期を診断して治療法を決定するまでで終わっていたものが、今年度は、症例ごとに患者さんの要望、特に妊孕性の観点からも治療法を選択する視点を持つことを考えさせられました。

超音波セミナーでは、昨年は胎児スクリーニング超音波の意義についての講義があり、これも勉強になりましたが、今年は正常胎児の胎児測定を中心に、エコーの基本的な使い方を学ぶ時間が多く設けられ、エコーをより身近なものに感じるようになりました。腹腔鏡セミナーでは、昨年と同様に鉗子とカメラで画面越しに結紮縫合の練習を行っただけでなく、鉗子越しの臓器の感触がリアルに感じられる腹腔鏡シュミレーターで臓器の把持の難しさや電気メス鉗子の効果を実験。アドバンスコースでは昨年参加できなかった、顕微鏡授精体験や、ダヴィンチのシュミレーション実習に参加し、研修医では臨床でなかなか触れることのない婦人科手術を体験しました。

若手医師企画では、皆さんの通常業務や年単位でのステップアップのお話が、産婦人科として勉強していく上での将来のケースモデルとして、とても参考になりました。

これらの体験は、これからの専門分野の選択のきっかけになる貴重な体験であったと思います。 松田尚子 (杏林大学 研修医 1年目)

全国の産婦人科同期や先輩ドクターと実習で貴重な経験をしたり、宴会、2次会で色々な話ができたりとても楽しい思い出があり、今年も自ら参加しました(実は今年で三回目です...)。昨年は震災後の復興支援もかねて例外的に岩手で行われたので2年ぶりの長野上陸です。

初日はグループに分かれ、エコー、病理、内視鏡と盛りだくさんの実習をしつつ、同グループのメンバーと親睦を深めます。初めて参加した学生の時、エコーや内視鏡に触れるのがドキドキだったのを懐かしく思い出しました。臨床を少なからず経験した今では、エコーや内視鏡に触れるのも少しは慣れて、各実習の理解もより深まるものとなった気がします。夜の宴会では、久しぶりに会う仲間や、実習で知り合った友達、先輩ドクターと楽しく過ごしたことを覚えています。

二日目は主に先輩ドクターの産婦人科での生活をつつみ隠さず聞ける貴重な機会でした。男女に分かれて行われる時間もあり、今後の参考になりました。男子の方がどんなことをやっていたのが毎年気になりますが、未だに詳細不明。参加者としてこの会に参加できるのが今年で最後と思うと寂しく感じつつ長野を後にしました。

頼近奈奈 (北海道社会保険病院 研修医)

学内の臨床実習で産婦人科の学問的・臨床的内容と医局の先生方の人柄に魅かれていた私は、医局の先生の勧めもあり、なら躊躇することなく参加を決めました。

1日目に婦人科腫瘍・内視鏡・産科エコーの講演と実技、2日目に講演と若手医師企画という内容でした。さらに、昼間の講義実習を発展させたアドバンスコースが1日目の夜に催されており、顕微鏡授精コースに参加しました。他にも、手術用ロボットを使った体験もでき、非常に充実した2日間でした。

将来産婦人科を目指している人はもちろん、少しでも興味のある人は是非参加をお勧めします。全国の各分野の権威の先生方のお話を聞き、自由討論会で若手の先生方の情熱に触れることで、産婦人科の魅力が伝わってきます。そこで、皆さんの未来への扉が開くことは間違いありません。さらに、同じ目標を抱いて頑張っている仲間との出会い。これが私たちの未来の宝になるものだと思っています。 谷口瑞毅 (名古屋大学医学部医学科6年)

初期研修医の声

初期研修医の方々に、産婦人科を選んだ理由や、産婦人科に寄せる夢を語って頂きました。

元々外科志望でしたが、病院実習中に分娩に立ち会い、ダイナミックさに感動したことがきっかけで徐々に興味を持つようになりました。さらに不妊や婦人科腫瘍、更年期などの多彩な領域に対し躍動感あふれる診療を行っている先生方を見て、産婦人科医を志そうと決心し、思い切って大学病院の産婦人科研修プログラムを選びました。現在、徳島大学病院で初期研修2年目、今年既に産婦人科研修を開始して半年になります。生殖内分泌・婦人科腫瘍・周産期・女性医学の各領域の先生方から丁寧に指導頂きながら、

合併症や胎児異常を抱える妊婦の管理、悪性腫瘍の治療などを経験しつつ、その難しさとやりがいを感じながら日々充実した研修生活を過ごせています。

学べば学ぶほど課題がそれ以上にいくつも出てくるような状況ですが、地域の産婦人科医療に貢献することを一つの目標として、これからも研鑽を積んでいきたいと思ひます。

地域の産婦人科医療に貢献することが目標の一つ

徳島大学病院・乾宏彰



親が産婦人科医として開業していたこともあり、中学・高校と同級生からよく婦人科に関する事で相談を受ける機会がありました。その中で強く感じたことは、一般社会では女性は婦人科的な知識についての教育を受ける機会が乏しく、不安に感じていることが多いということです。そのことを感じてからは、産婦人科は女性の一生に関わっている科であり産婦人科医として女性が健やかな生活を送ることを手助けしたいという意思が芽生えました。

また、産婦人科は非常に広い分野を取り扱っており、

外科系・内科系両方の領域があることも理由の一つです。実際産婦人科を研修させていただきましたが、分娩・内分

泌疾患・腫瘍の治療における喜びや不安・悲しみなどの伴う現場を経験することができました。まだまだ勉強すべきことは多いですが、すべての女性の力になれるような産婦人科医師になりたいと思ひます。

女性が健やかな生活を送ることを手助けしたい

岡山大学病院・兼森美帆

